



郊外から横浜を考える

2015年7月13日

郊外班

(森田智美、横澤直人、田口遼、北川まどか、森本時生、小島裕一)



提案のコンセプト：

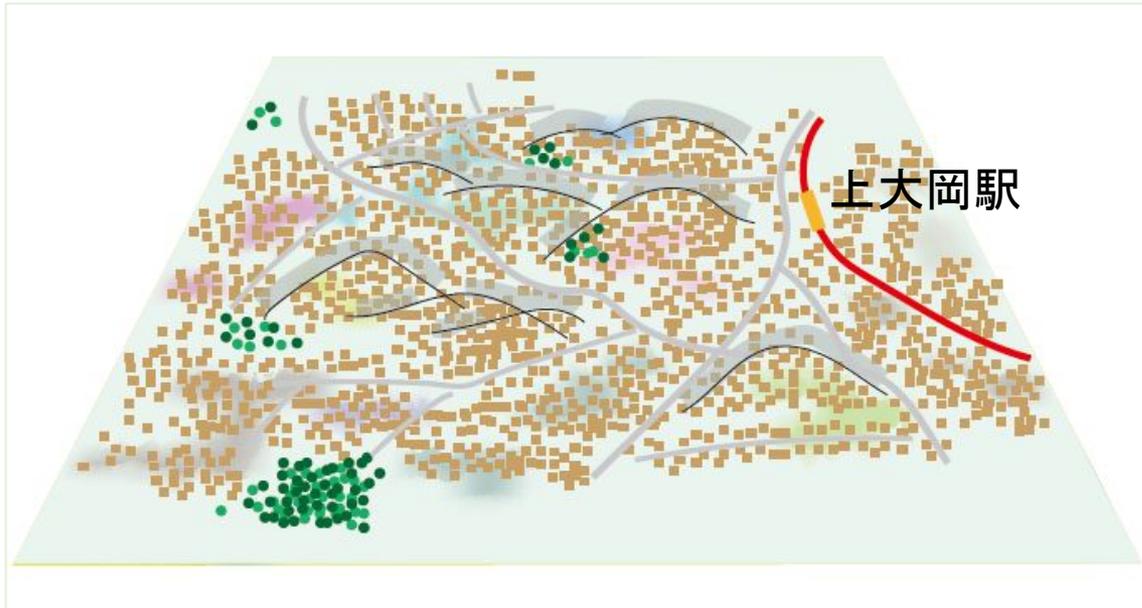
人が**集い**、

地域と**寄り合い**、

暮らしを**紡ぐ**

地域の分析 (1/4)

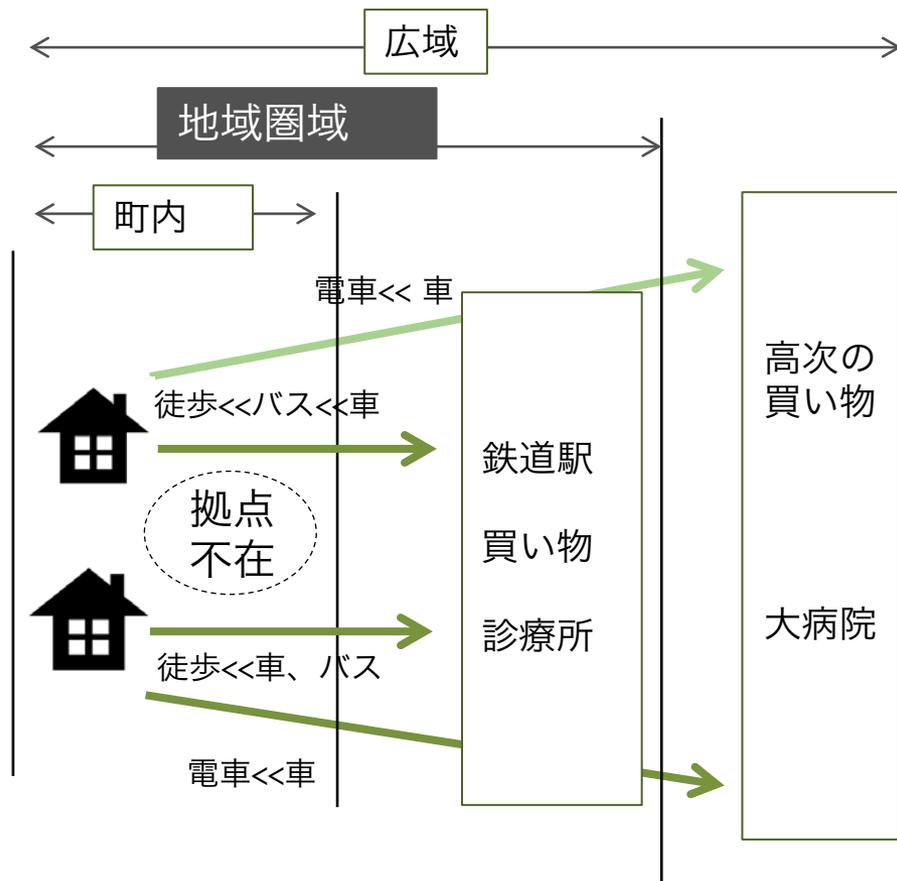
①急峻な地形



- ・ 歩行に適さない急な坂 + 狭くて歩きづらい街路
- ・ 買い物や通院、災害時の避難所への移動の支障に

地域の分析(2/4)

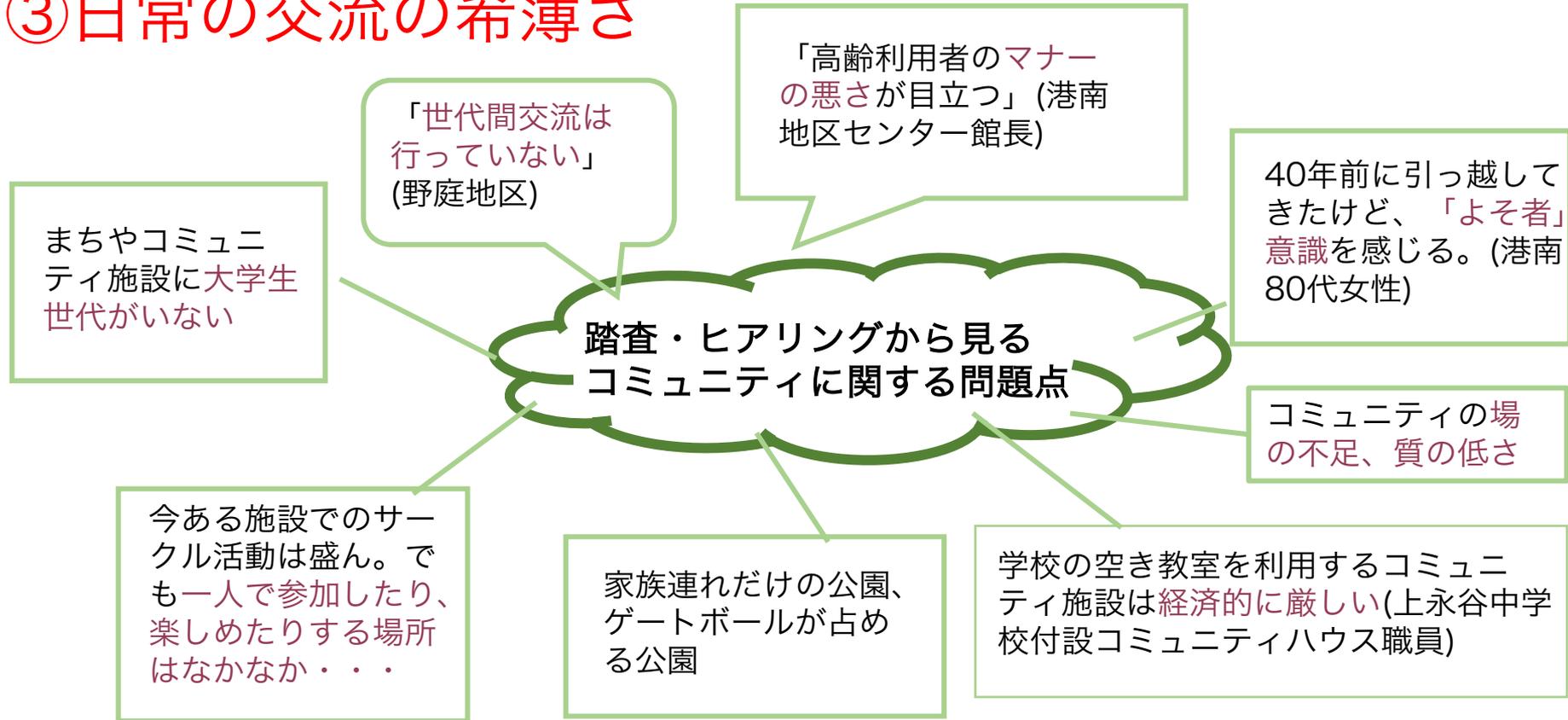
②交通と偏った地域圏域



- 徒歩圏の商業、医療施設の欠如
- バスや自動車依存の移動

地域の分析(3/4)

③ 日常の交流の希薄さ



- ・ 世代間交流希薄
- ・ 閉鎖的なコミュニティ
- ・ 公園等の交流の場が少ない

地域の分析(4/4)

④地域ぐるみの祭り



現在

子供が数多く参加



- ・子供と地域に一体感
- ・祭りが盛り上がる
- ・世代間の交流

今後

参加する子供が減少



- ・参加する大人の数も減る
- ・祭りの集約、縮小
- ・地域の活力の低下
- ・日常のコミュニティが失われる

- ・祭の主体は子供に偏る
- ・町内単位の祭りにとどまる

「人が集い、地域と寄り合い、暮らしを紡ぐ」

人が集う

- ・ 気軽に足を運べる場所
- ・ 徒歩圏内の新たな拠点

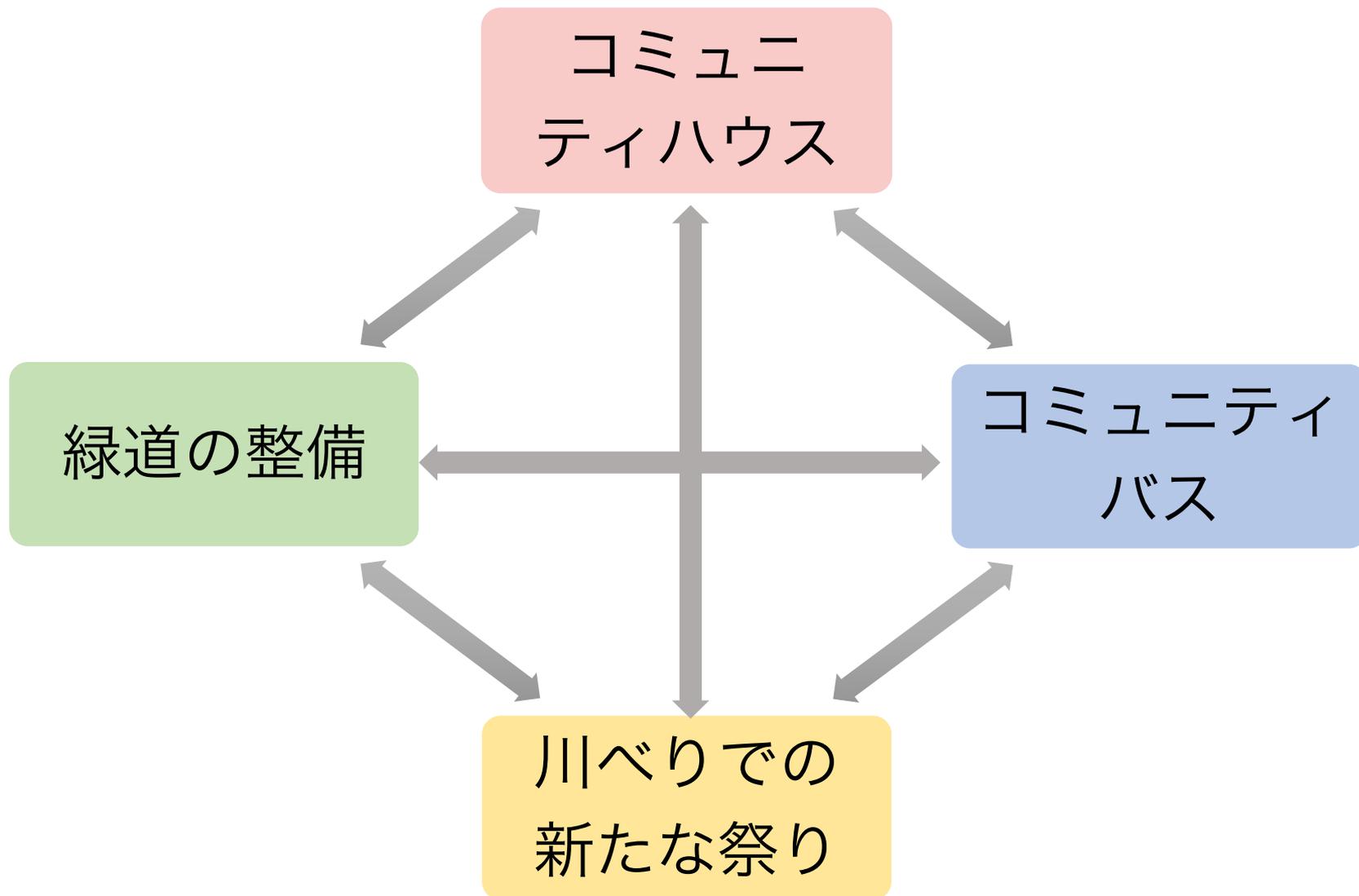
地域と寄り合う

- ・ 坂、川といった地形的特徴を加味
- ・ 人と土地との繋がり

暮らしを紡ぐ

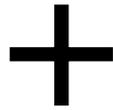
- ・ 住民自身が地域を担う
- ・ 日常生活を良くする+ 非常時の共助

提案の四本柱



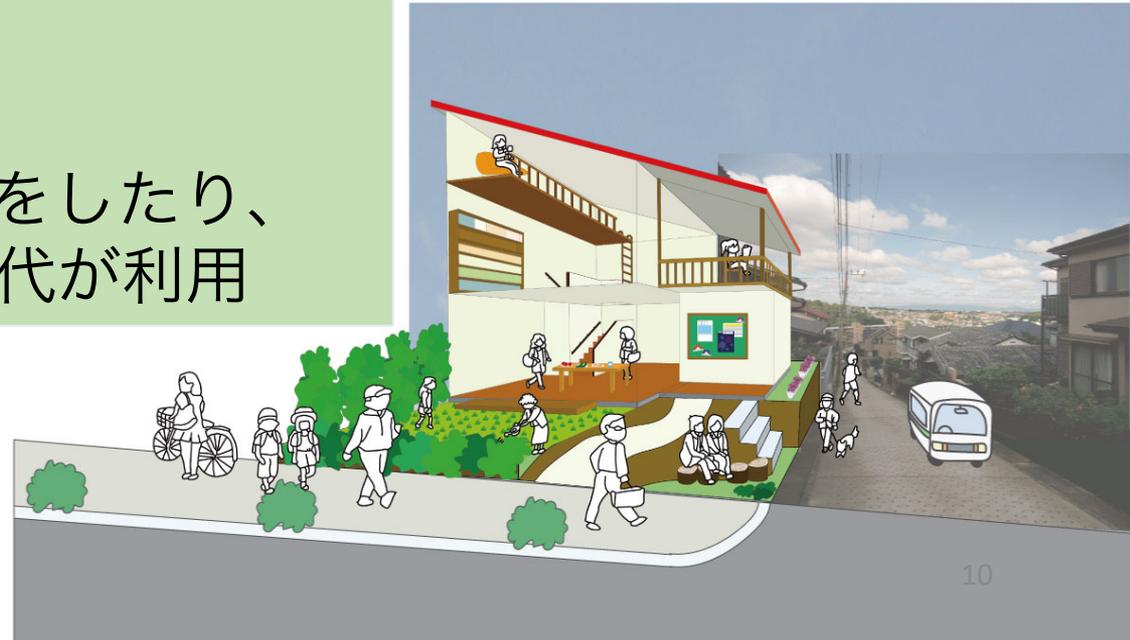
コミュニティハウス

- ・ **商業**：食料品や日用品などを定期的に販売
→徒歩圏内の買い物先に
- ・ **交通**：コミュニティバスの発着、路線バスの待合い
→歩道とつなげ、世代を問わず住民が訪れやすい空間の設計
- ・ **防災**：最寄りの仮の避難所として



交流

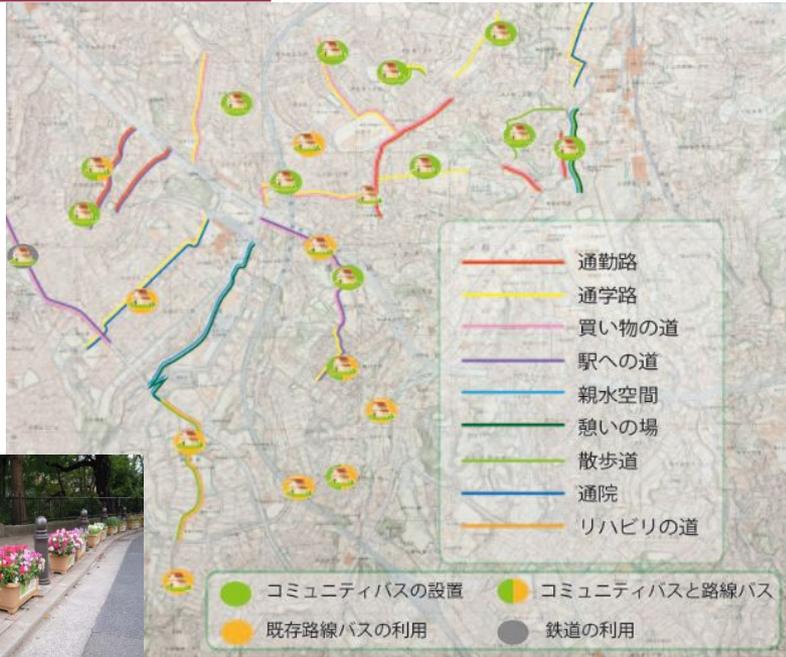
- ・ 空間、時間を共有
- ・ 子供を預けたり、会合をしたり、自習したりと多くの世代が利用



緑道の整備

歩道の拡充と親水空間

歩道の拡充



親水空間



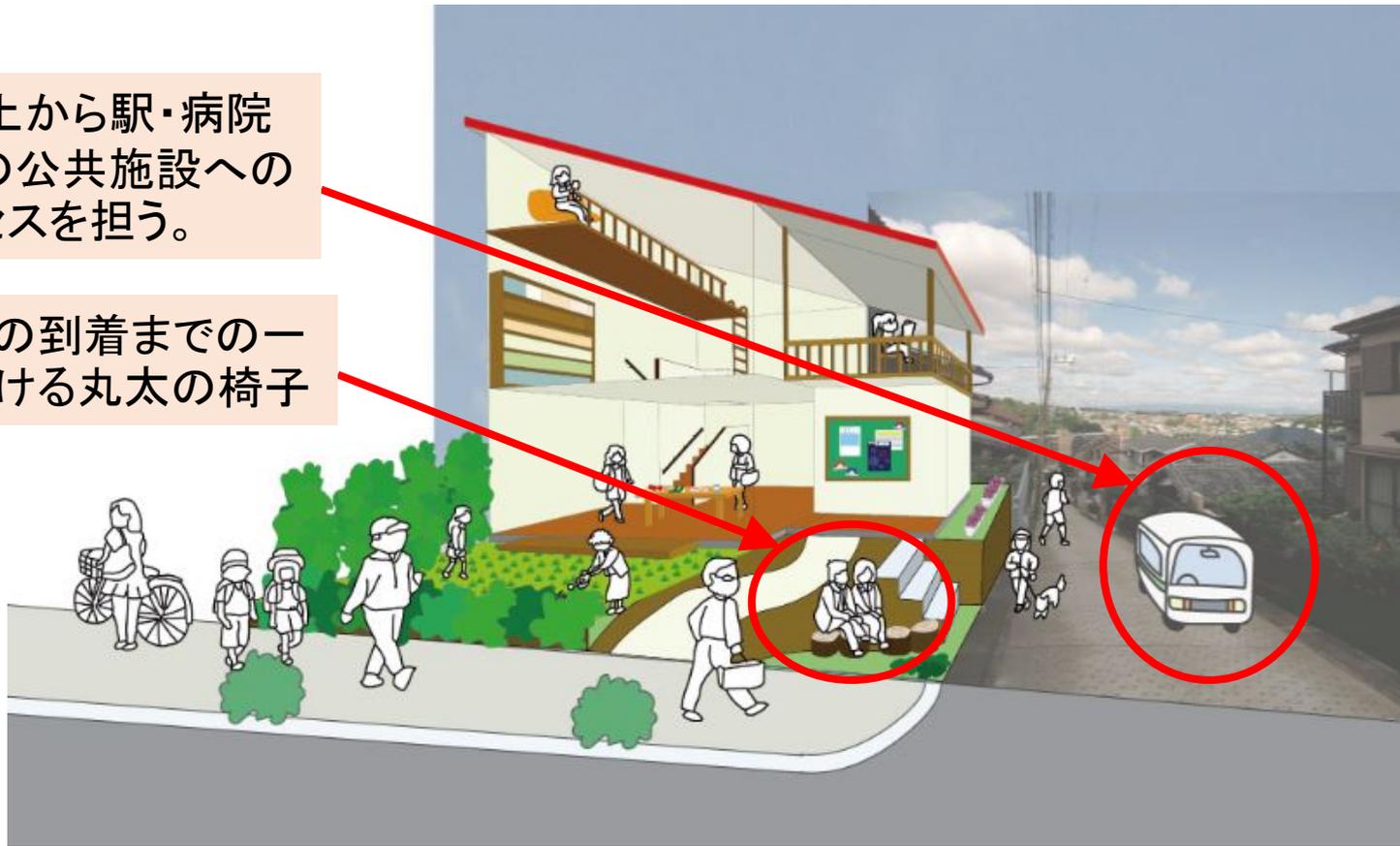
- 車と歩行者を分け、安全を確保
- プランターの設置をコミュニティハウス単位で

- 大岡川、馬洗川沿いを親水空間に
- 維持管理をコミュニティハウスごとで分担

コミュニティバス

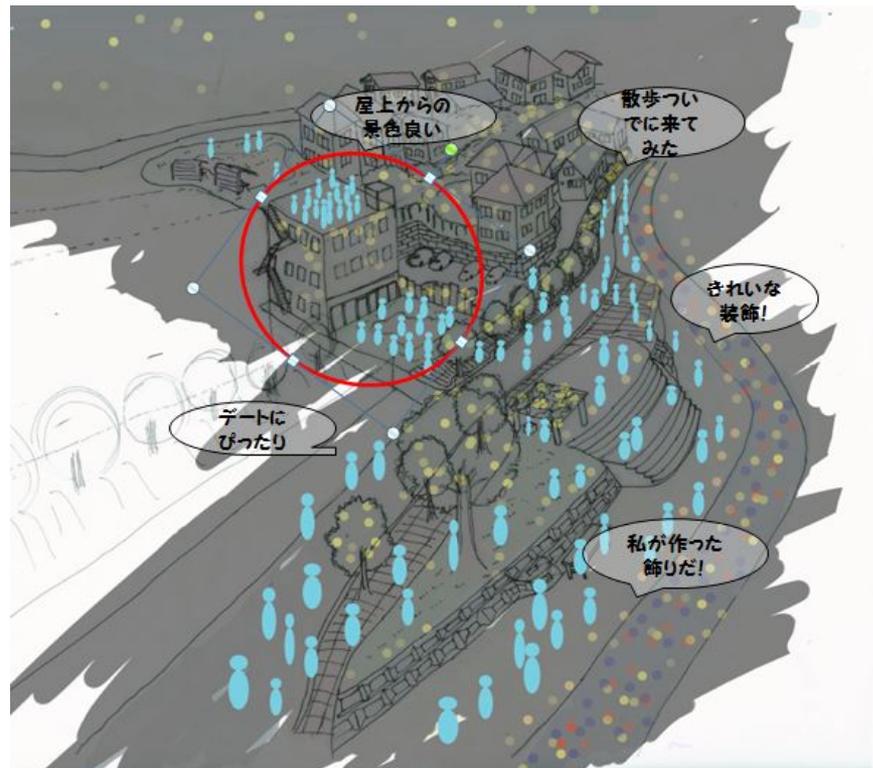
坂の上から駅・病院
などの公共施設への
アクセスを担う。

バスの到着までの一
息つける丸太の椅子



- 既存路線バスの空白地帯のモビリティ確保
→コミュニティハウスと駅、病院、スーパーをつなぐ
- 自家用車への依存を減らし、子供やお年寄りにとっても住みよい街へ

地域の川沿いでの祭りの創始



- 緑道化した大岡川、馬洗川沿いで実施
- 染物の飾りをコミュニティハウス単位で制作し、ライトアップを行う
- すべての地域住民が気軽に来て楽しめるイベント

まとめ

人が集い

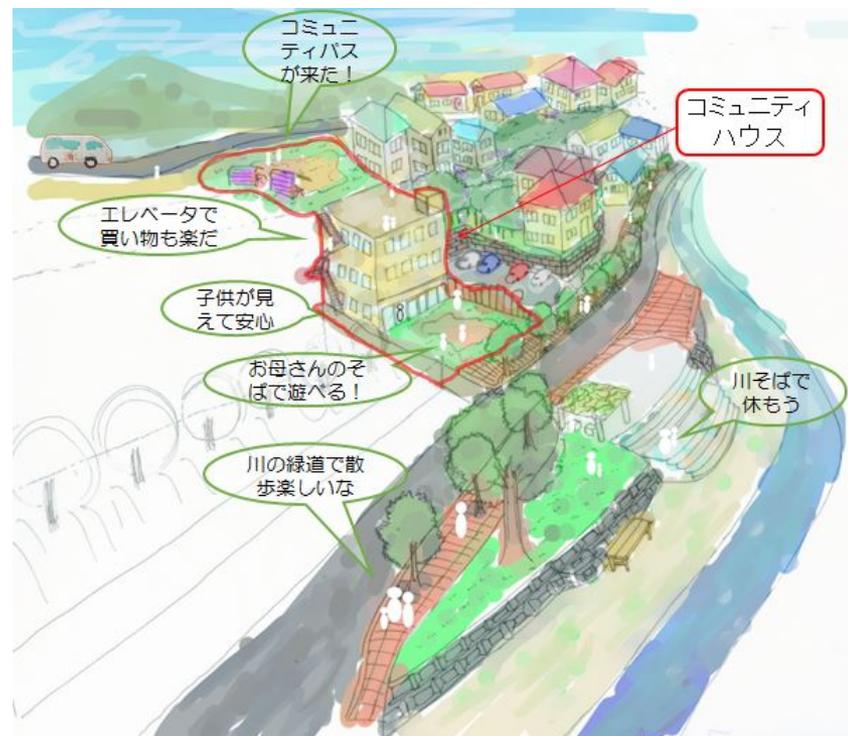
一利便性を備えたコミュニティハウスに人が集まる

地域と寄り合い

一川べりの憩いの道や坂の良さを感じられる歩道

暮らしを紡ぐ

一買い物や団らんなどより良い日常を住民の手で行う



利便性とコミュニティを両立させた上で、
地域住民が主体的に未来を育んでいく